

関谷学校における重要な学校行事は、孔子を祭る秋の釈菜と、学びへの決意を新たにす正月の読初（よみぞ）の儀であった。創学350年の今年、釈菜は江戸時代に倣って株持姿で行った。来年1月4日に行う読初（よみぞ）の儀も当時と同じく、儒教の経典・四書の一つ『大学』を扱ったことにした。

『大学』は、朱子学の創始者・朱熹（1130～1200年）が『礼記』から独立させ、孔子の弟子・曾子によるものとして由緒正しい経典に仕立てた。儒教の革新に努めた朱熹は、印刷出版技術を活用して自身の解釈や考え方を世に広め、権威づけた。

『大学』の解釈も例に漏れない。リーダーの在り方が記された冒頭の一文、「明德を明らかにするに在り、民を親しましむるに在り、至善に止まるに在り」の真ん中の句を、朱熹は「民を新たにするに在り」と読み替えた。古注では、リーダーは「天から授かった本来持っている徳をさらに輝かせ、庶民が親愛の情を持って接し合うようにすることであり、最高

岡山県青少年教育センター 香山 真一
関谷学校 校長

一日一題

「読初の儀」に願う

善の境地に「いる」と「ある」となるが、朱熹の新注だと「旧弊に浸る」庶民を革新させることなる。強力なリーダーシップで民を教え導くことを為政者に求めている。

官僚としては不遇だった朱熹だが、死後、孔子以来の正統を継ぐ学者として認められ、官僚を指す科挙受験者は、朱熹の考えを踏まえなければ合格がかなわないまじりになった。やがて朱子学を批判する陽明学が現れ、儒教は多様性を持つ思想へと発展する。現代の目から見れば頑迷で視野が狭く思える一方、時代を超えて心を打つ言葉も少なくない。

読初の儀には例年、多くの方々に参加する。学びへの決意を新たにしていただくとともに、古典を自分の在り方、生き方を考える機会として、現代に生かす知の生まれる機会となることを願っている。

2020・11・30

◇ 「一日一題」は12月1日より、朝刊「ちまた」面でお読みいただけます。